

# 通巻51号 December,2018

# 日本通信教育学会報

Japan Association of Distance Education

## 目 次

・第66回研究協議会を終えて……………	1	・事務局の移転について……………	4
・平成30(2018)年度『研究論集』投稿募集……………	2	・会員の声……………	4
・第4回「研究交流集会」のご案内と発表者募集……………	2	・通信教育の動向……………	5
・平成30(2018)年度第2回理事会報告……………	3	・通信教育のこの1冊⑭……………	6
・会員……………	3		

## 第66回研究協議会を終えて

日本通信教育学会第66回研究協議会が、2018年11月24日(土)桜美林大学四谷キャンパス(千駄ヶ谷)で開催されました。参加者数は、29名(会員26名、非会員3名)でした。3連休の中日という開催日も影響したのか、参加者数は例年の約半数でありましたが、活発な議論が行われ実りある会となりました。情報交換会には20名の方が参加し、一層の交流を深めたり、今後の学会活動について論じあうなど、大いに盛り上がりました。

研究協議会の午前の部は、白石克己会長の冒頭挨拶の後、自由研究発表3件が行われました。総会および昼食・休憩の後に行われた午後の部には、特別研究発表1件と講演、シンポジウムが行われました。

### 【自由研究発表】

長谷川晴通会員は、「国鉄通信教育の創成期」と題して、今回新たに入手した資料をもとに、国鉄通信教育の立ち上げの詳細や初期の教育体制などに関して発表されました。石川伸明会員は、「高校通信教育における学習指導要領改訂(平成30年3月告示)をめぐる問題」と題して、先に改訂された学習指導要領の問題点の指摘や、今後の高校通信教育に関する法規制の課題や提言などについて発表されました。鈴木克夫会員は、「社会通信教育の誕生一戦前との連続性をめぐって」と題して、戦前の実業講義録と戦後の社会通信教育との関連性について、具体的な経営主体を分析して発表されました。

### 【特別研究発表】

「研究動向に見る学校通信教育—高校と大学の比較から—」と題して、石原朗子会員、小暮克哉会員、山鹿貴史会員による特別研究発表がありました。指定討論者は、白石克己会長が担当されました。まず、石原会員より、研究目的と課題、研究方法が述べられ、その後、小暮会員から高校通信教育の研究動向が発表されました。山鹿会員からは、大学通信教育の研究動向が発表されました。石原会員から高校と大学の比較検証した結果と総括が述べられ、最後に、白石会長との討論が行われました。

### 【講演】

土岐玲奈会員より、「文部科学省『広域通信制高等学校の質の確保・向上に関する調査研究協力者会議』から、通信・遠隔教育、高校教育について考える」と題した講演がありました。2016年6月から2018年3月まで行われた調査研究協力者会議について、議論の内容や論点について述べられ、また、通信制高校における遠隔教育の在り方について詳細に解説されました。そして通信制高校の質について、多様性への対応を充実させる必要性について言及されました。

### 【シンポジウム】

シンポジウムは、「通信教育と『合理的配慮』」というテーマで行われました。シンポジストは、井上恭宏会員(神奈川県立相模向陽館高校)、大西孝志氏(東北福祉大学)、松本幸広会員(日本発達障害ネットワーク副理事長)の3名、コーディネータは、手島純会員(星槎大学)でした。まず、コーディネータよりテーマの趣旨説明と論点の整理が行われ、その後、各シンポジストより20分程度、自身の経験を踏まえた合理的配慮に関する現状や見解について発表がありました。発表後は、シンポジストと参加者との質疑応答が行われました。合理的配慮

という注目度の高いテーマということもあり、実際の教育現場における合理的配慮に対する考え方や、具体的な実施体制、方法などについて、参加者から多くの質問がありました。

以上、例年より参加者は少なかったですが、各プログラムでは充実した発表や討議が行われ、今年度の研究協議会も滞りなく終わることが出来ました。最後に、研究協議会の準備と当日の運営にご尽力いただきました会員の皆さまと、円滑な研究協議会の進行にご協力いただきました参加者の皆さまに感謝申し上げます。

(小樽商科大学 田島貴裕)

## 平成 30 (2018) 年度『研究論集』投稿募集

下記の通り、平成 30 (2018) 年度『研究論集』への投稿を募集します。奮ってご応募ください。

### (1) 論文

#### ①題目届の提出

- ・提出方法：投稿を希望する会員は、期日までに題目等（①氏名、②所属、③題目）を事務局宛に電子メール（jade.office.obirin@gmail.com）にてお知らせください。
- ・提出締切：平成 30 (2018) 年 12 月 20 日（木）

#### ②原稿の提出

- ・提出方法：期日までに原稿（MS-WORD）を事務局宛に電子メール（jade.office.obirin@gmail.com）にて提出して下さい。
- ・提出締切：平成 31 (2019) 年 2 月 28 日（木）

#### ③刊行日（予定）

- ・平成 31 (2019) 年 6 月 30 日（日）

#### ④投稿規定・査読基準

- ・『平成 29 年度 研究論集』巻末、『日本通信教育学会報』通巻 50 号 2 頁、または日本通信教育学会 Web サイト（<http://jade.r-cms.biz/>）をご参照ください。

### (2) 書評・図書紹介

#### ①「書評・図書紹介」で取り上げる図書

- ・通信教育、遠隔教育などに関する内容を含み、かつ原則として刊行から 3 年以内（2016 年 1 月以降）のもの。

#### ②分量

- ・「書評」が 4,000～6,000 字程度、「図書紹介」が 2,000～4,000 字程度

#### ③投稿希望の提出

- ・提出方法：投稿を希望する会員は、期日までに、①氏名、②所属、③取り上げる図書の著者名・書名・出版社名・刊行年を事務局宛に電子メール（jade.office.obirin@gmail.com）にてお知らせください。
- ・提出締切：平成 30 (2018) 年 12 月 20 日（木）

#### ④原稿の提出

- ・提出方法：原稿は MS-Word で作成し、電子メールに添付して事務局宛（jade.office.obirin@gmail.com）にお送りください。
- ・提出締切：平成 31 (2019) 年 2 月 28 日（木）

#### ⑤その他

- ・「論文」と「書評・図書紹介」との同時投稿を認めます。
- ・必要に応じて査読委員会で採否を審査し、修正を求める場合があります。

## 第 4 回「研究交流集会」のご案内と発表者募集

下記の通り、第 4 回「研究交流集会」を開催します。通信教育に関する特定のテーマの検討、あるいは若手研究者育成を目的とした研究促進のため、当学会の事業活動として、3 年に一度、東京以外で実施するものです。

発表者を募集しますので、奮ってご応募ください。特に、東京で開催される研究協議会に参加することのできない関西地区在住・在勤の会員の皆様のご応募をお待ちしております。

**日 時**：平成 31（2019）年 3 月 23 日（土）13：00～17：00 ※終了後に懇親会を予定

**場 所**：京都華頂大学・華頂短期大学 3 号館 2 階 3-201 教室

〒605-0062 京都市東山区林下町 3-456 ※地下鉄東西線「東山」駅出口 2 から南へ徒歩 4 分

**参加費**：無料（懇親会費は別途）

**申込方法**：平成 31（2019）年 2 月上旬（予定）にお送りするプログラムを参照してください。

**発表者募集**：発表を希望する会員は、期日までに題目等（①氏名、②所属、③題目）を事務局宛に電子メール（jade.office.obirin@gmail.com）にてお知らせください。

・締切：平成 31（2019）年 1 月 20 日（日）

## 平成 30（2018）年度第 2 回理事会報告

平成 30（2018）年度第 2 回日本通信教育学会理事会が、平成 30（2018）年 10 月 5 日（金）15 時から 17 時に桜美林大学四谷キャンパス（千駄ヶ谷）で開催され、以下の事項が審議、報告された。

### 【審議事項】

#### （1）資金活用に関するワーキンググループの検討結果について

資料 1 に基づき、石原監事（委員長の松本理事の代理）より資金活用に関するワーキンググループの検討結果について説明があり、審議の結果、①周年記念事業を議案とした臨時理事会を 2018 年 12 月頃を目途に開催すること、②臨時理事会は今年度の予算に計上することを前提に、「事業計画」と「予算」を主な審議対象とすること、③会長・事務局・松本理事（資金活用に関するワーキンググループ委員長）の協議のもとに議案を作成することが承認された。

#### （2）第 66 回研究協議会のプログラム（案）について

資料 2 に基づき、第 66 回研究協議会のプログラム（案）について説明があり、総合司会を田島理事が、指定討論者を白石会長が担当することが了承された。

#### （3）第 4 回研究交流集会の開催について

鈴木事務局長より第 4 回研究交流集会の開催について説明があり、審議の結果、堀出幹事を中心として 2019 年 3 月頃を目途に京都で開催することが了承された。

#### （4）平成 30（2018）年度事業計画・予算（案）について

資料 3 に基づき、平成 30（2018）年度事業計画・予算（案）について説明があり、周年記念事業の予算に関して会長・事務局・松本理事（資金活用に関するワーキンググループ委員長）の三者で協議することが了承された。

#### （5）その他

鈴木事務局長より、次号学会報（2018 年 12 月発行予定）について説明があり、「通信教育のこの 1 冊」の執筆を白石会長が担当することが了承された。

### 【報告事項】

#### （1）平成 29（2017）年度決算報告監事監査の結果について

資料 4 に基づき、石原監事より平成 29（2017）年度決算報告監事監査の結果について報告があり、原案の通り承認された。

#### （2）課題研究について

石原監事より、課題研究について本年は実施されていない旨の報告があった。

## 会 員

Webページでは省略します

## Webページでは省略します

### 事務所の移転について

平成 31 (2019) 年 4 月 1 日より、本学会事務局を下記に移転します。また、平成 30 (2018) 年度末をもって役員  
の任期 (3 年) が満了となるのに伴い、事務局長を含む役員の変更を行う予定です。

・新事務局：星槎大学

## 会員の声

### 学会に期待すること

私の本学会入会の動機は研究を発表する場を欲してのところが強かったが、入会後は転職や仕事内容の変  
化などにより十分な研究時間の確保も出来ておらず、アクティブな活動はできていません。

そんな私に「会員の声」執筆の依頼がありました。「会員の声」として書けることは何なのか考えた末、本稿  
では学会への期待の部分を中心に以下の 2 点を書くことにした。期待というよりは希望の部分が強いかもし  
れません。

#### ①調査研究機能充実のために会員調査など学会の現状把握

本学会は、研究協議会での各会員からの発表題目からも明らかなように、通信教育という一本の柱はあるも  
のの、多種多様な分野の研究を行う会員の所属組織となっています。また、近年学会外での通信教育研究が活  
発であるとの報告もありました。

そうした状況の中、本学会は、学会外で公表される通信教育研究とどのような差異があるのか、どういったと  
ころに学会の強みがあるのか。学会自らが学会員にアンケートなどを通して学会の現状把握を行い社会に還  
元していくことは学術団体の使命ではないかと考えています。

#### ②通信教育研究を公表する場の拡大

本学会は、年一回の研究協議会と研究論集の発行が主な研究活動となっているかと思う。会員数も増加傾  
向にあるとはいえ、これ以上の学会主導の活動増は理事会の負担や費用面で難しいのかもしれませんが、極  
力そうした面に配慮した上で、多くの会員に研究活動を公表する場を設ける方策の検討に期待しています。  
例えば、若い会員の増加を考慮して研究協議会開催時にポスター発表のようなことが出来ないか、他の学会  
と共催の研究会は出来ないか等、検討しても良いのではないかと考えています。

ここまで書いて、そんなに言うなら、お前がやれという声が聞こえそうだが、あくまで、期待というか希望  
として書かせていただいた点、ご容赦願います。

小暮克哉 (岩手大学)

### ◆「会員の声」を募集◆

「会員の声」を本誌に掲載します。掲載を希望する会員は、原稿 (600~750 字程度、MS-Word で作成) を事  
務局 (jade.office.obirin@gmail.com) までお送りください。

## 通信教育の動向



## 全国高等学校通信制教育研究会

全通研の秋・冬の報告と予定は次の通りです。

## (1) NHK高校通信教育委員会

11月30日(金)午後、NHK放送センターにおいてNHK高校講座主催による標記委員会が開催されました。NHKから平成31年度の放送計画の説明があり、その後、全通研側から要望・意見などを伝えて番組向上に役立てていただきます。さらに早稲田大学人間科学学術院准教授森田裕介先生よりご助言がありました。

## (2) 平成30年度第2回理事会

11月30日(金)午後、NHK放送センターにおいて第2回理事会を開催しました。

30年度前半の活動報告・会計報告等とともに、「会員校名簿・会則等のデジタル化」「全通研会費の改正」「第73回全通研東京大会」について協議し、承認されました。

(事務局長 村越和弘)



## 公益財団法人 私立大学通信教育協会

本協会は、通信教育課程を設置する私立大学相互の協力によって、大学通信教育の振興を図ることを目的に設立されており、現在、その趣旨に賛同した35大学・17大学院・9短期大学の合計61校が加盟校となって運営し、大学通信教育の周知普及と水準向上の事業を推進しています。

## (1) 大学通信教育の周知普及事業

大学通信教育の在り方を広く社会に伝え、入学希望者に情報を提供するために、本協会主催の事業として「平成30年秋期合同入学説明会」(8~9月、全国5会場)を実施し、さらに12月15日には通信制大学院の合同入学説明会、来年1~2月には「平成31年春期合同入学説明会」(全国8都市、11日程)を実施します。

## (2) 大学通信教育の水準向上事業など

9月には文化庁から講師を招き、大学通信教育政策検討委員会のもと「大学通信教育メディア授業研究会」を開催しました。62名の参加がありました。10月には東京ガーデンパレスにて「大学通信教育職員研修会」を1泊2日で実施して職員の能力向上に努め、日本私立学校振興・共済事業団から講師を迎え「私学助成と大学通信教育~経常費補助金における大学通信教育に係る補助金交付~」の講演を行いました。74名の参加がありました。さらに12月には情報意見交換会を2本予定しており、京都大学から講師を迎えた「通信教育における障がいのある学生支援事業」を、文部科学省から講師を迎えた「改正免許法の経過措置について」を開催します。

(理事長 高橋陽一)



## 公益社団法人 日本通信教育振興協会

## (1) 文部科学大臣賞を受賞！

2018年11月17日(土)、東京都千代田区の主婦会館・プラザエフにて、当協会主催の第30回生涯学習奨励賞表彰式を開催しました。この表彰は、当協会認定の「生涯学習奨励講座」を特に優秀な成績で修了した者を対象に表彰するものです。今年度は文部科学大臣賞11名、公益社団法人日本通信教育振興協会会長賞27名、総勢38名の方々が栄えある賞を受賞しました。また、授与式の後、当協会理事：白石克己(日本通信教育学会会長)より、当協会が実施する学習指導員制度についての講演が行われ、半学半教の大切さを発表していただきました。式後開かれた祝賀会&学習指導員交流会では、受賞者の喜びの声、学習指導員の活動報告など多くの方々の発表などがあり、盛会裡に終了しました。

## (2) 全国の各地域で学習指導員が活動中です！

通信教育で学び、身に付けた知識や技能、また実社会で培った専門的な知識や技能を生かし、地域での生涯学習の支援者として活動する学習指導員の認定登録数は、延べ2,146名となりました(2018年11月27日現在)。指導分野も43を超え、教室を開講したり、公民館や生涯学習センターでの講師、小中学校での課外授業の支援など全国各地で活動中です。活動の一部は当協会ホームページ(<http://www.jais.or.jp/wewe/index.html>)で紹介しています。ぜひご覧ください。

(事務局長 友縄秀男)



## 通信教育のこの1冊⑭

## 阿部篤人著 『俳句—四合目からの出発』

(1984年 講談社学術文庫)

「俳句の本」、選書の間違いでは？と思う会員もいよう。たしかに俳句の入門書といえる。しかし私は、通信添削をする者はもちろん、およそ文章を綴る者が参照すべき本だと考え、ここに紹介する。

本書の目的は副題「四合目からの出発」が示唆している。富士登頂を目指しても「展望の利かない裾野を独りぼそぼそ歩くのをやめ、車を飛ばし、三合目を過ぎ、本日、いきなり四合目の木っ端天狗の仲間入り」ができる手引きにある。

俳句にせよ、通信教育のレポートにせよ、不合格スレスレの「三合目」あたりで「ぼそぼそ」歩いてやり過ごすことが多い。頂上が確実に見える「八合目」あたりにたどりつかない。「四合目」から出発したい、その処方箋を具体的に指南しているのが本書である。そのために、初心俳句を約15万句をカードにし分類したという。実際、初心者類似した句で例証しているから、説得力がある。

一例を挙げよう。「落第の代表作」という。

「秋の月を仰ぎ眺めて思い千々」

俳句では月は秋の句だから「秋の」は無駄、「仰ぎ眺めて」も月を仰いだり眺めたりするのは当たり前だから無駄。「思い千々」も著者が排除する「感情露出」という俳句の最大欠陥を含んでいるので不要。結局、「この句について結論を言えば『月』の一語で、他は皆省略すべきものでした」。

季語を入れ五七五と詠んだのに「月」しかメッセージにならないと切り捨てる。ムダなく・ムラなく・ムリなく文章を書け、と教える。なるほど添削指導にあたる時にも、分量に増やすための水増しレポートによく出合う。

著者はこの論調で「水増し俳句」「お涙頂戴俳句」「ベタ惚れ俳句」「自己宣伝俳句」、はては「ああして、こうして、どうした俳句」などを指弾。駄句の共通点をユーモラスに伝える。しかし笑ってばかりはいられない。わが文章を検証する際の、自戒になるからである。逆に、著者から駄目を出された句にも、むしろ面白い、珍しい句も発見できる楽しみもある。

舌鋒は鋭いが、弱者いじめをしているわけではない。芭蕉などの大俳人もやり玉に上がる。堅固な理論への著者の自信がうかがえる。

千代女の有名な句「朝顔に釣瓶とられて貰ひ水」への評——朝顔を憐れみ、ことさら水を他からもらったという風流振りをわざとらしくひけらかします、と。

名句とされるあの句を嘘っぽいと断ずる。

高浜虚子の句も捨て置かない。文語表現の初歩的誤りをこう突く——「植う」を「植ゆ」と書くのは昔の試験では落第点ものです。(略)大御所的存在が、かかるていたらくですから困ったものです、と。

総括していえば、初心者もプロも紋切り型の俳句に安住している。しかもこの点は俳句にとどまらない。日本人の物の見方に共通する「てこでも動かない固い岩盤」だ、と主張する。

さて、添削指導のヒントになればとひもといいた本書だが、「添」はほとんどなく、「削」の多い「べからず集」ともいえる。著者の言い分では、自分が指摘した「削」に従い「添」は主体的に工夫せよ、ということだろう。

しかし、添削者としてわが身を振り返ると、本書同様、添削といいながら「添」は少なく「削」が多かった。序論が長すぎるから簡潔に、引用が多すぎるから短く、という類の講評が多かった。レポートのどこをどう修正し何を書き加えるべきかの助言が少なかったと反省する。初心者だからこそ、「添」をも書き込まないと不親切な指導になる。

「添」の一つの策は「褒める」ことである。大上段に批判せず、よい点を指摘する。さらにレポートからうかがえる相手の力量に応じて、問題点を具体的に指摘し「教科書のある箇所を読み、こう修正してごらんなさい」と添えることである。

弦から放った矢は戻ってこない。しかし「言葉の矢」は戻ってくる。ところが、本書も、レポートの添削指導も、作句した人・レポート提出者から反論がない。戻るはずのない矢に安心して、一方的に批判の矢を放っている観がある。もちろん「不合格・再提出」のレポートは戻ってくる。しかし弁解や反論は書けない。真偽が確定できる数理的な通信指導では一方的でもよいだろう。しかし多くの人文系の領域では、真実は受講者と指導者との相互交流のなかにある。インターネットを活用する遠隔教育では「添」も「削」も伝え、しかも文字・数字に限らず、図解・音声・映像も加え、相互交流を図る添削が求められる。

なお本書は入門書らしく詳細なルビが施されているが、ここでは紙面の都合で省略した。著者の名だけはルビをしておこう——しょうじん、と。

白石克己(元・佛教大学)

## 日本通信教育学会報 通巻51号

発行日 平成30(2018)年12月10日

発行所 日本通信教育学会事務局

〒194-0294 東京都町田市常盤町3758 崇貞館B608 桜美林大学 鈴木克夫研究室内

日本通信教育学会事務局 E-mail: jade.office.obirin@gmail.com